

測量から出来形管理まで「一気通貫」

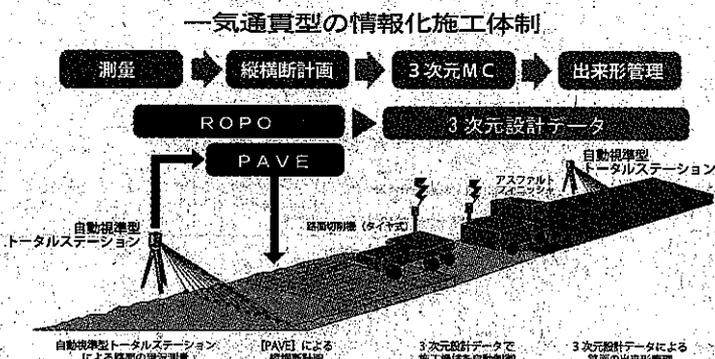
NIPPOは、劣化した舗装路面を補修する切削オーバーレイ工事を行う際、現況測量から施工後の出来形管理までを同じデータを使って行う情報化施工システムを確立した。計測ネットサービステム「ROPO」の道路縦横断計測システム「ROPO」から出力されるデータを重機の自動制御にも利用。これにより、情報化施工のハードルの一つとされる3次元設計データの作成業務が省略可能となり、「工事全体をパッケージにした一気通貫型の施工が実現する」（佐藤博樹代表取締役専務執行役員）という。ユナイテッド（東京都中央区）の協力で構内実験に成功したことから、今後は公道での試験施工に移り、有用性を検証する予定だ。

NIPPOがシステム

NIPPOは、傷んだ道路の表面を数センチ取り除く切削機や舗装の合材を敷きならすアスファルトフィニッシャーを制御する情報化施工の実績を積み重ねてきた。ただ、重機が設計通りに動くよう指示を出すには、測量結果と設計図書を基に担当者が手入力で3次元設計データを作成しなければならず、これが大きな手間になっていた。そこで同社が着目した

3次元設計データ作成不要に

必要な設計データとして利用できるようにした。況や出来形の測量のたび



これにより、公道に出ることがないため、作業の安全性や効率は格段に高まる。このように、測量、さらには切削の準備作業として行う路面へのマーキング作業が不要になるだけでなく、切削機やフィニッシャーなどの重機による本作業以外で公道を規制することなく、

同社は、「今回の取り組みを社内にとどめるつもりはなく、業界に広めたい」と、

「ROPOが採用されているのは、測量方法は、ターゲットと（左藤専務）としており、路面の維持補修工事への情報化施工の普及拡大に必要なら、つながらるシステムとして、積極的に活用していきたい」と、

日刊建設工業新聞
平成23年2月22日掲載